

[優秀賞]

伊藤 真理さんレビュー (秋田市)

書評対象作品

『喜嶋先生の静かな世界』森 博嗣 著 (講談社)

理系とか文系という分類に意味があるとすれば、小説は絶対に文系の世界であると思っていた。それがこの小説によって覆された。

子どもの頃から文字を読むことが苦手だった主人公の「僕」。高校までの勉強は退屈で、興味の対象は数学と物理。大学に期待したものの、講義のつまらなさに失望。そんな「僕」の人生が、卒論で配属された研究室の喜嶋先生との出会いで大きく変わっていく。

出世したいとか、認められたいとか、そんな“普通”の人が考えることは喜嶋先生の引き出しには一切ない。昨日も今日も明日もただひたすら研究に没頭する。一方で、まさかのプロポーズもやってのける。もちろん喜嶋流だ。その後の顛末にはもっと驚かされることになるのだが……。

先輩の中村さんもかなりの変わり者だ。喜嶋先生に言わせれば「生まれながらにネジが抜けかけている」となるが、「そこが他人に対する優しさの起源になっている」と思う「僕」。2人とも喜嶋先生のピュアで無垢な“そのままさ”に共鳴する受容体を持った“同類”なのだ。研究生活で「僕」は深く考え抜くことを経験し、科学の深遠さを知っていく。

「学問には王道しかない」と喜嶋先生は言った。王道とは勇者が歩くべき清く正しい本道のこと。それは人間の美しい生き方であり、喜嶋先生の生き方そのものだと「僕」は思い至る。この場面は凜として力強く、つくづく美しい文章だと思う。

年月がたち、助教授になった「僕」は語る。「今の僕は王道から外れている。外れてしまったのはいつからだろう？」と。たたみかけるように続く自問自答がキュンと胸に迫る。なんだか泣きたくなるほど分かってしまうのだ。

「研究とは」という問い掛けは、いつの間にか読者を「生きるとは」という哲学の領域まで連れていく。文学も哲学も科学もつながっていることに気付く爽やかな衝撃とともに、人生のかみしめ方が変わる、生きることがいとおしくなる、そんな小説だ。